

2021年10月1日に修復事業の開始をお知らせした「一休宗純と森女図」について、進捗状況を報告します。



① 表装裂の補修が完了し、掛軸装の形となりました。

掛軸装の形にする際には、本紙と表装裂地を仮張りし、掛軸装の形に取り付ける「付け廻し」という作業を行います。レポート③にて報告した紫地印金の一文字も新たな裂で裏打ちを行い、元の掛軸装の形となっています。現在は表面を向けて乾燥期間に入っており、作品本来の形に着々と近づいていることがわかります。



▲ 本紙と表装裂地が板に貼り付けられている様子。

▲ 表装裂の裏打ち作業の様子。

② 欠損部の補彩を行いました。

修理の原則として、欠損部分とオリジナルの部分は目視で判別できるように補彩を行うこととなっています。

国宝や重要文化財に関しては、補彩で入れる色は画面中一色となるため、補彩部分が目につく仕上がりになることがあります。

今回の修復における補彩では、円窓の中と素地の色がかなり異なるため、円窓部分の補彩は素地を基本としたやや暗めの色調で塗り分けを行いました。鑑賞の妨げとなるような欠損部に補彩を行うことで、作品本来の姿に少しでも近づくことができました。



▲ 修理前の本紙の状態です。欠損部分が目立っています。



▲ 赤色でマークされた部分が料紙欠箇所、青色でマークされた部分は料紙が欠失し、補填されている箇所になります。



▲ 補彩後は目視で欠損箇所が判定はできますが、下地に馴染んだ補彩がされていることがわかります。

本作品は2021年10月から三菱財団の文化財保存修復事業助成を受けて、本格的な修理に着手しています。